

# コイノボリ

やうみ よいち  
八海宵一

短編  
小説



えっと、あの一。

こんにちは。

その、そろそろ五月なんで、今年もまたやろうかな、と。

そう、いつものやつ。

こっちの都合にあわせて大丈夫？ あれだったら、こっちがあわせるけど？

ほんとに？ そう、うん、それじゃあ、そういうことで、うん。

えっと、あの一……。

……じゃあ、母さんには内緒で。

ぼくは十数年間、母さんからユタカさんの悪口を聞いて育ってきた。いわく、あのひとは、気が利かない、甲斐性がない、やれ、女たらしだ、バクチに手を出す、うすのろで、要領が悪い——好きで結婚したはずの相手なのに、母さんは思いつくたびに悪口を言い、いつもぼくに同意を求めた。

築二十年以上の古びた市営住宅に、ぼくと母さん、それにユタカさんの三人で住んでいた。当時、四才だったぼくは、人形みたいに無口で、よくぼんやりと突っ立っている子供だった。母さんの傍らで、ただひたすら悪口を聞き、こくりこくりと曖昧な相槌を打つ子供だった。友達たちが公園で遊んでいる間中、それが仕事であるかのように、ぼくはせまく薄暗い部屋のなかで意味もわからずに首を縦にふり、いろんな愚痴を聞いてきた。

だれかが張子の虎を見て、ぼくにそっくりだといったことがある。あんな、ふらふら振ってるつもりはないんだけど、動きがかなり似ているらしかった。肩をすくめながらうなずくようすが、肯定しているのか、いないのか、話を聞いているのか、いないのか、よくわからないといわれたことがある。だけど、それは愚痴を聞くのに向いていた。母さんは、ぼくのうなずきに満足し、ずっと愚痴をこぼしていた。

仕事（当時、母さんはお菓子のオマケを組み立てる内職をしていた）の愚痴。近所の〇〇さんが△△しない、と愚痴。スーパーの店員の態度がわるい、つり銭をまちがえたと愚痴。そして、ユタカさんの愚痴。毎日、多少のバリエーションはあったにせよ、ほぼ同じ内容の愚痴をこぼし、小さな作業机に極彩色のプラスチックをぶちまけては、はしご車や、複葉機を組み立てていた。少し甲高いイライラした声が、毎日、BGMのようにヒビの入ったコンクリートに響いた。

ぼくも、母さんも三時まで仕事をする。三時をすぎると、たいてい前の日の夕方にタイムサービスで買っておいたエクレアかプリンが冷蔵庫から姿を現し、おやつの時間に突入する。ふたりとも、そのときだけはなんにも言わない。いや、言ってはいけなかった。食事中に、余計なお喋りをしてはいけない。それがルールだ。だから、ただ、もぐもぐと口を動かし、コーヒーと牛乳をそれぞれ、ごくり、と飲みほし、テレビのワイドショーを黙って見終え、そのまま、母さんは

夕飯の下拵えをすまし、また内職の続きを始める。

それから、一、二時間ほどして、ユタカさんが帰ってくる。そのころ、ユタカさんはすでに前の会社でリストラにあい、失業していた。特に大きな失敗をしたわけでもなかったが、とくになんの成果もなかったから、ユタカさんはリストラの候補にあがり、そのまま、会社を辞めさせられた。その日の晩、ユタカさんはいつものように帰宅し、ただ苦笑しながら、ひとこと母さんに「リストラにあった」とだけ報告した。どうして、そうなったのか、自分がどんなに頑張っていたかといったことは一切、口にしなかった。

母さんは甲高い悲鳴のような声で、追求しようとしたが、ユタカさんは、頑なに黙ったままで、なにも応えなかった。ユタカさんは毎朝、仕事を探しにヨレヨレのスーツを着て出かけ、夕方遅くに帰ってきた。何枚もの履歴書をカバンに入れ、何社もの会社へ面接に出かけていたらしい。だけど、気が利かず、甲斐性もない、うすのろで要領の悪い、女たらしのバクチ打ちを採用してくれる会社なんて、そうあるもんじゃない。

半年探しても見つからないんだから、まず、まちがいない。

証明写真代がバカにならない、と母さんがこぼしていた。

でも、ユタカさんはなにもいわない。ただ、だまって帰宅し、そのまま部屋のすみのほうで、ごろん、と横になったきり、夕飯ができるまで、起きてこない。母さんは内職の手を止めず、下唇を噛みながら、そんなユタカさんを毎日睨みつけていた。

沈黙と重い空気が部屋中を覆い、一分もしないうちに、部屋中が煙草くさくなる。

母さんは、それだけでユタカさんが、どこでなにをしてくいたのか、わかるらしく、できあがった内職の箱を玄関に持っていくついでに、ユタカさんの尻を力いっぱい蹴り上げた。ユタカさんは壁のほうをむいたまま、尻をもぞもぞと動かすだけで、あいかわらず、なにもいわなかった。

そのかわりに母さんが、金切り声を張りあげる。

「パチンコに行くヒマなんてないでしょう！」

そして夏だろうが、冬だろうが、おかまいなしに窓という窓をあけ、煙草の臭いが完全に消えるまで、自分にしか聞こえないくらいの小さな声で、ぶつぶついつていた。

ユタカさんは、なにをしても満足にできたためしがない、と母さんはいう。

だから、そうなんだろう。母さんの言うことは、たいてい正しい。だから、ぼくは曖昧にうなずく。

仕事はダメ、手先は不器用、人づきあいにはヘタで、トロい。男気はない。頭のめぐりは悪いし、見ていてイラつく……ユタカさんは、そういう人なのだ。

ぼくは不幸にも、ユタカさんが以前、なんの仕事をしていたのか覚えていないので、そのダメっぷりを空想するしかない。でも、それは簡単に空想することができた。まあ、勝手な空想はだれにでもできるから、あっているかどうかは、べつなんだけどね……。

「ぼく、ユタカさんみたいには、ならないよ」

いつだったか、面とむかっていったことがある。突然吐き出された言葉に、ユタカさんは顔を引きつらせ、しばらく瞬きを繰り返していた。

「は？」

「ぼくは、ユタカさんみたいには、ならないの」

「……そういえって、いわれたのか？」

ぼくは頭をふった。

「……そうか……そりゃあ、立派だな」

ユタカさんは、そういうのがやっとだったのだろう、そのあとはなにも言い返してはこなかった。ただ、ぼんやりとぼくを見つめていた。なんの感情も浮かばない瞳。見ているうちにぼくのほうが、なぜだかひどく悲しくなり、目から涙がボロボロこぼれた。だんだん我慢ができなくなって、大声で泣き出すと、ユタカさんは困った顔をしながら、煙草の臭いが染みついた大きな手でゆっくりと、ぼくの頭を撫でてくれた。だけど、もう遅い。泣きやみたくても、感情のコントロールがうまくできないから、どんどん声が大きくなって、涙があふれ出てきた。まるで、走り出した車のように勢いがいいから、止めたくても止まらない。

夕飯の仕度をしていた母さんの鋭い声が、台所から飛んできた。

シュンになにをしたの！

その瞬間、ユタカさんはすごい形相で台所を睨みつけたが、やっぱり、なにもいわなかった。

ユタカさんが怒鳴ったのは、ぼくの知っているかぎり、ただの一度きりだけだった。

四月中ごろの日曜日。

幼稚園から帰ってきたぼくは、画用紙で作ったコイノボリを手にしたまま、むくれていた。

どうしてそんなことになったのか、細かい話は忘れてしまったけど（たしか友達の家で飾ってあった大きなコイノボリがきっかけだったような気がする。いまでも風を受けて、青空のなかを悠然と泳ぐ、そのコイノボリの姿を、はっきりと覚えているから）、その日、ぼくは、家のベランダに大きなコイノボリが欲しいと駄々をこねていた。

珍しくグズリ、手足をバタバタと動かしながら、「コイノボリが欲しい！」と、ぼくはわめいた。どうして、あんなに執着したのか、わからない。ただ、あのときは、本当に空に泳ぐ三匹のコイが欲しくて、仕方なかった。普段、ものをねだったことなどないのに、あのときだけはちがっていた。

母さんは、洗濯物を取りこんでいるところで、足元にいるぼくが邪魔らしく、ときどき、つりあがった目で睨みつけていた。

「コイノボリ買ってよ！ みんな、大きいのもってるんだよ！」

母さんは、なにもいわない。

「ねえってば……」

ぼくがヤケになって、エプロンをひっぱると、はずみで取りこんでいた洗濯物が、母さんの手から地面に落ちた。洗ったばかりの白いシャツがヒビ割れたコンクリートのうえで、細かな砂にまみれる。

次の瞬間、後頭部に膝蹴りを喰らっていた。

顔をベランダの手すりに思い切りぶつけ、鈍い音が響き終わる前にタンコブができた。ぼくが声にならない声で泣き出すと、母さんも金切り声で、なにか叫んでいた。

競馬中継を見ていたユタカさんが、寝転んだまま、うんざりしたような顔をベランダに出した。そしてとうとう、いつまでたっても鳴り止まないサイレンのようなぼくらの声に、ユタカさんがキレた。

「いい加減にしたらどうなんだ！ コイノボリなら、おまえの家にあるだろう！ なんておまえはそうなんだよ！」

「あんな大きいの、こんな小さいベランダに出せるわけないでしょ！ 下の人にまた近所迷惑だって言われるんだから。謝りに行くの誰だと思ってるの？ いつも肝心なときに逃げ出すくせに！」

あきらかに下の階まで聞こえるだろう大きな声で、母さんは怒鳴った。

「いいわよ、取って来なさいよ、実家まで取りに行きなさいよ！ どんな顔して行くつもりよ？ 飾りたいなら、飾りなさいよ！ 掃除機かけただけでも、うるさいっていわれるのに！ さぞかしいろいろ苦情をいわれるでしょうね！」

「いい加減にしろ！ おまえも、いつまでも泣いてるんじゃない、シュン。こっちに来い！」

ユタカさんは立ち上がり、ベランダに上半身だけ出すと、タンコブを押さえていたぼくの手をグイッとひっぱった。ふだん、家にいるときは寝てばかりなのにすごい力で、泣きじゃくるぼくをそのまま持ち上げた。

「……行くぞ」

ユタカさんは不意につぶやき、ぼくの手を掴んだまま、家をとび出した。

母さんを放ったまま、ユタカさんは駐車場まで無言で歩き、ぼくを助手席に押しこむと、すぐに車のエンジンをかけ、荒っぽくアクセルを踏みこんだ。いつもとちがう運転に、エンジンが恐ろしい唸り声をあげて応える。目の前の景色が、あっという間に過ぎ去り、見たこともない風景が、どんどんあらわれた。

どこにいくんだろう、と思った。`家出、という言葉は、そのとき、まだ知らなかったから、ただなんだかわからない不安で胸がいっぱいになっていた。黙って運転するユタカさんの横顔が、とても怖かったから、これから行く先になにか悲しい結末がまっているんだろうと直感した。ユタカさんは煙草の紫煙を吐き出しながら、目を細め、景色のむこう、はるか遠くを見ていた。

その遥か遠くに、ゴールがあるかのように。

ユタカさんは黙ったまま、遠くを見ていた。

どこをどう走ったのか……泣き疲れて、途中で眠ってしまったからわからない……気がつくと、ぼくは、濡れたハンカチを額に当てられた状態で、ユタカさんにおぶってもらっていた。

「歩くか？」

起きたことに気づいたユタカさんが、しばらくして聞いてきた。声の調子がいつものユタカさんにもどっていた。車から降りて、もうずいぶん歩いているらしく、ユタカさんの背中は、少し汗ばんでいた。熱気のこもった背中は、とても心地よかった。

ぼくが頭をふって背中に顔を埋めると、背中が笑い声で、小刻みにゆれた。

ユタカさんは笑ったまま、少し先にあるライトブルーの建物を目ざして歩き続けた。その建物は横長のとても大きな建物だった。

建物のなかは薄暗く、生暖かった。リノリウムのツルツルした床が、天井の青い照明をぼんやりと反射させていた。鳥の鳴き声や滝の流れる音がする通路には、ほかの人たちもたくさんいて、みんな楽しそうにしていた。父親に抱きつく子供や、手をつないでブンブンふっているカップル、肩車をした拍子に目隠しをされて、困っている年配の男性。

薄暗い室内で、みんないろいろなことをして笑っている。

壁には大小さまざまな水槽がはめこまれていて、美術館のように飾られた額縁の中で、カラフルな熱帯魚が涼しげに泳いでいた。

ぼくは、ここが水族館だということに、ようやく気づいた。

額縁のあいだに、パイナップルや、バナナの木が置いてあったので、最初、なんだかわからなかったが、どうやら、ここはアフリカの魚を集めたコーナーらしかった。

ぼくは、ユタカさんの背中に乗ったまま、エンゼルフィッシュや、ピラニアたちを熱心に眺めた。絵本や図鑑で見たことはあったけど、キョロキョロと動き回る魚を見るのは、初めてだった。ぼくは興奮し、夢中になった。

「この魚知ってるよ、ピラニアっていうんだよ、なんでも食べちゃうの」

「よく知ってるな。じゃあ、これは？」

「これはね、リーフ・フィッシュ」

ユタカさんが違う水槽の前を歩くたびに、ぼくは指さし、早口で知っている魚の名前をいった。もちろん、名前の知らない魚もたくさんいた。わからないのは全部、ユタカさんに名前を聞き、質問した。ユタカさんは魚のことにやたらと詳しく、どんな魚を指さしても、スラスラと応えてくれた。

いろんな水槽を見終え、魚の名前を応え終えたユタカさんは、最後に一番奥にある大きな水槽の前で、立ち止まり、満足げにうなずいた。

「降りてみるか？」

ぼくは、こくん、とうなずき、ユタカさんの足元に立ち、水槽を覗きこんだ。

水槽は地下にも広がっていて、とても広かった。そして、その大きな水槽の中央に、それはいた。

全長三メートル以上はある寸胴で、途轍もなく大きな魚が三匹、切り倒された丸太のように、底で静かにエラを動かしていた。大きな口をかすかに動かし、水の流れにまかせ、悠然と泳ぐその姿は、まるで、そうー。

「コイノボリだ」

ユタカさんが言った。

ぼくは、こくん、とうなずいた。

ピラルクー。

オステオグロッサム目オステオグロッサム科。学名、アラパイマ ギガス。体重200キログラム。

アマゾン川流域に分布する世界最古にして最大級の淡水魚は、多少すすけた色をしているものの、たしかに見ようによっては、単色のコイノボリだった。

ユタカさんは、当然のようにいった。

「うちのコイノボリは、生きてるから、ここで飼ってるんだ」

「ほんとに？」

今度は、ユタカさんがうなずいた。

「だって考えてもみろ、こんな大きな魚、家で飼えないだろ？」

「そりゃあ、そうだね」

水槽の前で、相似形の頭をふたつ並べながら、お互いに、うんうんとうなずいた。もっともらしい顔をして、お互い顔を見合わせると、いまにもふきだしそうになる。

ユタカさんは、ぼくの手をしっかりとにぎり、つぶやいた。

「母さんには、内緒だぞ」

「……うん」

「エサ代がかかるって、怒られるからな」

ユタカさんは、わざと人差し指で目を吊り上げて、声色を使った。

ぼくは声を立てて笑った。ユタカさんが本気でいってるわけじゃないことも、ピラルクーが、ぼくの家のコイノボリでないことも、なんとなくわかっていたから、大きな声で笑い飛ばせた。

「下の人にも怒られるしね」

「それもあるな」

ユタカさんは、静かに破顔した。

「シュン」

「うん？」

しばらく見つめたまま、何も言わなかった。ただ静かに頭を撫でてくれ、ジュースを買おう、と水槽から離れ一一、そして、そのまま家にもどった。

それから、しばらくして、母さんと、ユタカさんは、離婚した。

母さんは、すべてユタカさんのせいだと、言っている。

だから、おそらくそうなんだろう。でも、ぼくは、あの日のことを思い出すたびに考える。

本当にどうしようもない人が、あんなウソをつくために、わざわざ水族館まで行くんだらうか。だいたい、なぜ気が利かないと思うのか、どうして甲斐性なしなのか、ぼくには、わからない。

わからないから、ぼくはダイヤルをプッシュする。

年に一度だけ、五月五日の前の日に。

いまだに、「父さん」と呼べない、血のつながったユタカさんに……。

……え？ ああ、ごめんごめん。うん、聞ってるよ。

昔のこと思い出してたら、ちょっと、ぼーっとしてた。

えー？ 今に始まったことじゃない？

そりゃ、ないでしょう。ユタカさんのこと思い出してたんだよ？

うん、そう、もう十年になるね。うん、わかってる。

仕事うまくいってるの？ ほんと？ なら、いいけど。

うん、そうだね、わかった。

じゃあ、明日、水族館のまえで、十時にね。

うん、母さんには、もちろん内緒で。



## コイノボリ

<http://p.booklog.jp/book/49465>

著者：八海宵一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yaumiyoiti/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/49465>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/49465>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.